

今日からしばらく「キリストのかたち」というテーマのもとコロサイ書を学んでゆきたいと思います。コリント第二 3:18に「私たちはみな、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに変えられていきます」とあります。クリスチャンの生涯とは何かと言うなら「主と同じかたちに変えられてゆくこと」なのです。主と同じかたちというのは「キリストのかたち」のことであり、信仰生活の目標は生涯かけてキリストのかたちを知ってゆくことであるとも言えます。そしてキリストのかたちを知る上でコロサイ書が最適な書であるとの理解からこの書を取り上げたいと思うに至りました。

私は高校2年生の秋に近所の母親同士が親しい方の大学生の息子さんが声をかけてくださって教会に通うことになりました。半年後の春の高校生のキャンプで信仰の決心をいたしました。その後、ちよくちよくその息子さんのところに通って聖書の手ほどきを受けました。いつも学びをする前に聖歌で賛美をします。私は高校生会に通っていましたが礼拝等の教会の集会はまだ通い始めたばかりでしたので聖歌の歌は殆ど知らなく、さらに悪いことにその人も歌うことが苦手と言いましょか、音がうまくとれないようで（控え目に言ってますが）、多分第三者がもしいたら、不思議な光景に見えたことかと思えます。それでも歌い終わるとその方が祈って、聖書の話に自然と入ってゆきました。当時のことを思い返すと状況がどうであろうと聖書のみことばによって励まされ、慰められ、心探られたり、指摘されていたように思います。今日、共に学びますコロサイの教会もまさにそのようにして成長したのです。

この手紙はパウロによって書かれました。パウロ自身はエペソという大きな町で伝道し、そこで毎日福音を宣べ伝え、聖書を教えていたのでした（使徒 19:9-10）。聖書を学びたいという人たちがエペソにやって来て、ここでパウロから聖書を学びました。聖書を教えてもらってからそれぞれ、自分の町に帰って、人々に聖書を教え、福音を宣べ伝えるようになったのです。コロサイの町はエペソから内陸に250キロほどのところにありました。コロサイからエパfrasという人がエペソに来て、しばらく滞在し、パウロから聖書を学んでいました。そしてエパfrasは、自分の町、コロサイに帰り、そこで福音を伝えたのでした。そうして、救われる人が起こされてコロサイの町にも、教会が生まれたのです。7節に「あなたがたは私たちの同労のしもべ、愛するエパfrasから福音を学びました。」とあるのは、そのことを言っています。コロサイの人たちはパウロはもちろんのこと、イエス・キリストについても見たこともなければ何も知りません。ただ聖書のみことばによってつながり、救われたのです。その意味において今の私たちと全く同じです。みことばによって救い主が示され、信仰が与えられ、神の前に悔い改めて、救われたのです。そしてそれが教会へと成長していったのです。蛍池ももとはバーソルド宣教師の家や近く公民館を借りて宣教活動が始まったのです。どこの教会も始まりはそんなもんです。

1. パウロの感謝

さて、パウロがコロサイの人々のことを聞いて、最初に口にしたのは「感謝」という言葉でした。3節に「私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。」とある通りです。私たちが神にささげる祈りには「賛美」、「感謝」、「悔い改め」、「願い」、「とりなし」が含まれます。神の素晴らしさをあがめる「賛美」、神がくださった恵みや祝福への「感謝」、神を悲しませるようなことをしてしまったことへの「悔い改め」、神にかなえていただきたい「願い」、他の人の幸いを祈る「とりなし」。祈りには、そうした要素がありますが、その中で、忘れていけないのは「感謝」です。

パウロは、ローマで囚われの身となっていた自分をエパfrasが訪ねてくれたことを感謝しています。けれども、それはエパfrasひとりではできなかったことではありません。コロサイからエペソまで出て、エペソから船に乗り、ローマに向かうのは生涯のうちに一度あるかないかの「大旅行」でした。大変な時間、費用もかかったことでしょう。それをサポートしたのはコロサイのクリスチャンたちでした。自分たちの指導者が長い間コロサイを留守にするのは、人々にとって大きな痛手でしたが、コロサイの人々は、そうした犠牲をも惜しまなかったのです。パウロはそのことを感謝して、コロサイの人々に宛ててこの手紙を書きました。人から受けた親切を感謝で返す。それはとても美しいことです。留学中に大変お世話になっ

た Y 先生は御礼を言うたびにいつも「私にたいする御礼ではなく、それをあなたが関わってゆく人にしてあげるようにしなさい」とおっしゃいました。こうすることによって神の恵みがますます拡がり、人の心は豊かになります。家族や親しい間がらでは、「してもらってあたりまえ」という気持ちになることもありますが、いつも、お互いに「ありがとう」と言いあって過ごすことができたなら、お互いの関係はどんなに良くなることでしょうか。それは自分にも相手にも祝福を与えます。

2. 信仰・希望・愛

今朝の箇所はパウロからコロサイのクリスチャンへの感謝を込めた挨拶の部分です。それではパウロはコロサイのクリスチャンの何を感謝しているのでしょうか。それは、三つのもの、「信仰」と「希望」と「愛」です。4 節に「キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛について聞いたからです。」とあって「信仰」と「愛」が出てきます。5 節には「それらは、あなたがたのために天に蓄えられている望みに基づくもの」とあって、「望み」、つまり「希望」について語られています。パウロはコロサイのクリスチャンに与えられた「信仰・希望・愛」の三つの賜物を感謝しているのです。コリント第一 13:13 に「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です」とあるように、「信仰・希望・愛」の三つは、クリスチャンにとって何よりも大切なもの、クリスチャンを生かしているもの、言わばクリスチャンのいのちです。「信仰・希望・愛」のどれを失っても、クリスチャンはクリスチャンでなくなってしまう。名前だけのクリスチャンになってしまい、内実のないものになってしまうのです。「信仰・希望・愛」は、クリスチャンをクリスチャンとしてあらしめているものと言ってよいでしょう。

しかも、「信仰・希望・愛」の三つは常に一体で、切り離すことはできません。「信仰・希望・愛」は三つ葉のクローバーのようです。三つ葉のうちひとつでも切り取られたら、もうクローバーでなくなってしまうのと同じように、「信仰・希望・愛」のうちどれかひとつでも取り除かれたなら、他のものは無意味なものになってしまいます。5 節には、「信仰」と「愛」は希望に基づいていると教えられています。「希望」なしに「信仰」も「愛」もないのです。また、コリント第一 13 章に「山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです」(コリント第一 13:2) とあるように、「愛」のない「信仰」は欠陥のある信仰です。「完全な信仰」と書かれていても、つまり信仰においては申し分ないように見えても「愛」のない「信仰」は「完全」どころか、「不完全」な信仰になってしまうのです。逆に、信仰に基づかない「愛」は、高く、聖く、深く、大きい愛とはなりません。コリント第一 13 章に「(愛は) 不正を喜ばずに真理を喜びます」(コリント第一 13:6) とも教えられているように、本当の愛は決して真理をないがしろにしません。真理を慕い求め、それを守り、それを喜ぶのです。そして、私たちが真理に結びつけるのは「信仰」なので、「信仰」なしには「愛」は本物の愛にならないのです。

このように「信仰・希望・愛」の三つは強くつながっています。互いに互いを必要としています。三つが共に成長していくのです。しかし、「信仰・希望・愛」の成長には最初に「信仰」、次に「希望」、そして「愛」という順序があります。「信仰・希望・愛」をチューリップのような球根にたとえるなら、信仰は「根」で、希望は「葉」です。愛は「花」であり「実」です。愛は、信仰の根に支えられ、希望の葉に養われてはじめて花を咲かせることができるのです。誰もが「愛」を求めます。「愛の人」になりたいと願っています。しかし、「愛」だけが独立して成長することはありません。愛を育てたいと願うなら、「信仰」から始めなければなりません。人と人の間でも、信頼のないところに、愛は育ちません。まして、神と人との間では、神への信仰や信頼のないところでは、神の愛を受けることも、神を愛することもできないのです。愛を育てるために、まずは信仰を育てましょう。

3. みことばはいのちと力

では、信仰はどのようにして育つのでしょうか。それは「みことば」によってです。みことばに「聞く」ことによってです。ローマ 10:17 に「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」とある通りです。今日のコロサイ人への手紙でも、5 節で「あなたが

たはこの望みのことを、あなたがたに届いた福音の真理のことばによって聞きました。」と言われていす。コロサイの人々はエパfrasから、この「福音の真理のことば」を聞きました。聞いて、イエス・キリストを信じ、神の国の希望を持ち、そして、愛を与えられたのです。ここで「聞く」という言葉はたんに耳に聞こえてくるという意味ではなく、もっと積極的に、耳を傾けて聴くということです。さらに耳を〔傾けて聴く〕ことから進んで〔受け取る、体験する〕といった言葉のほうが適切かもしれません。6節に「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来…」とあるように、みことばを「聞く」というのは、みことばによって伝えられる恵みを受け取り、その真理を理解し、実際に体験することを意味しているのです。ちなみに理解するということがアンダースタンドつまりみことばの真理の下に立つこと、それは神の前に遜って「神様、あなたの御心を私にお語り下さい、お示してください」と神に聴いていく姿勢があつてこそそのことです。

みことばにはいのちがあり力があります。6節に「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。」とある通り、福音はペンテコステの日以来、わずか30年で当時のローマ帝国のあらゆるところに広まりました。パウロは言いました。「この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばはつながれていません。」(テモテ第二 2:9) そうです。みことばはあらゆる束縛を打ち破り、迫害を乗り越え、全世界にひろがり、私たちにも届いたのです。私たちは、このみことばによって罪と死の恐怖から解放されたのです。

みことばのいのちと力は、世界にひろく働くとともに、人のたましいに深く働きます。私たちのたましいを造りかえ、私たちを愛で満たすのです。6節に「実を結び成長しています」とありますが、私たちのたましいのうちに結ばれる「実」が愛の実であることは、言うまでもないことです。聖書は神からの愛のメッセージです。神からの「愛のことば」を聞くことなしには、神の愛は分かりません。神の愛が分からなければ、神を愛することも、他の人を愛することも本当の意味ではできないのです。今年の教会のテーマは「神を愛する者となる」です。神の愛を知らなければ、どんなに力強く「神を愛します」と言ったところで自己満足で終わってしまいます。もう知っているからとかよく分からないからと見切りをつけるのではなく日ごとに神様が備えて下さった恵みを体験するためにみことばに聞きましょう。聞き続けて、毎日毎日、一刻一刻、神の愛を確認していきましょう。聖書には、神への「愛のことば」が数多くしるされています。私たちはどうやって神への愛を言い表したらよいか分からない者たちですから、神は、私たちのために聖書の中に、すでに、そのようなことばを与えておいてくださっているのです。聖書に数多くある神への賛美のことば、感謝のことば、祈りのことばを習い、それを使って、神への愛を言い表していきましょう。私たちはこの世を去る時に何を残していけると言うのでしょうか？ 信仰・希望・愛です。それが次の世代や後に続く信仰者への最大の贈り物となるのです。